

F ACULTY D DEVELOPMENT

I N V I T A T I O N

山梨大学教育人間科学部

第 9 号

Jul. 15, 2004

第 1 回学部 F D 研修会報告

本学部の F D として最初の研修会が、6 月 30 日（水）の 13 時 15 分から 1 時間 30 分にわたっておこなわれた。学部長の堀哲夫先生（理科教育講座）により、「私の授業改善への取り組み」と題して、ポートフォリオ評価^(*註1)を軸とした授業改善の提案が示された。昨年までの授業公開では、講義の公開には快諾をいただいたものの参観者が数名程度と少なかった。今回の研修会も、F D ワーキング委員の間では参加者数の少ないことが心配されていたが、堀先生の発表が始まると来場者が増え、学部教員約 40 名、学生・院生 10 数名、事務職員数名の計約 60 名の研修会となった。発表の後で、受講者数や内容による授業のやり方の違い、学生の現状にどこまで寄り添って授業をすべきか、学習履歴の記録や形成的評価^(*註2)、などについての質問や意見の発表が続いた。

研修会終了後、数人の参加者に今回の研修会の感想や、その他の F D の進め方についての意見をお願いした。いただいた原稿からは研修会の様子もわかり、研修会での意見交換を補う面もあるため、本号には、できるだけ多くの方の文章を掲載することとした。

堀先生には、学部長自ら率先して授業改善の提案発表をしていただいたことに対し、F D ワーキング委員一同、感謝申し上げます。
(I)



(*註1) 詳しくは、『一枚ポートフォリオ評価 理科 ～子どもと先生がつくる「学びの足あと」～』堀哲夫編著（日本標準）

(*註2) 刻々に変化する生徒個人の学力をモニターし、調べるための評価。

以前、他大学で文学を教える機会があり、まさに高等保育園と化した大教室内で講義を成立させることの困難さに直面したことがある。居眠り、特に私語には閉口した。年に何度かはこちらもキレた。

出席などまともにとっていては時間の無駄だし代返の可能性もある。そこで思いついたのがその日のまとめの小テストを毎回おこない、ついでに感想・質問を書いてもらうことだった。講義そのものへの参加度も高まるのではないかという期待もあった。実際、その成果はあったと思う。それは小テストのせいも勿論あるが、それだけではない。こちらとしても小テストを準備しながら覚えてもらいたいポイントを考えねばならず、授業を展開するうえでそれが地平線上にちらつき授業構成そのものに役立ったのだと考えている。

堀先生が導入された「学習履歴」も地平線を用意するための道具と思われるが、あくまでも教員には自分を見つめるメタ教育的機会、さらに学生には学習者としての自分を見つめるメタ学習的機会を与えるための手段である点が、私が書かせた小テスト（+感想・質問）の類とは質を異にする。露骨に成績評価に結びつけてはメタ学習にはならない、確かに。

堀版「学習履歴」はA3版ぐらいの大きな厚い画用紙を各学習者用に1枚ずつ用意し、その紙に毎回の講義の中で「一番大切だと思ったこと」「受講後の疑問点等」をセメスターを通して書かせるものである。「一番大切」という曖昧で主観的な条件にミソがあるようだ。教える側はともすればく送信したこと＝受信されたこと＞という理想的等式に縛られ、予め方向付けされた問いにより、期待通りの反応を求めようとする（感想・質問の類が教員の自己満足的手段と化す危険性は参加者から指摘された）。しかし、教育のコミュニケーションは双方向的であるべきで、学習者の（意外性を含む）自発的な反応を見ながら、それを送信内容にうまくフィードバックさせなければ、教育者としての自分を見つめるメタ教育的機会にはならない。正にその通りだと思うし、FDが基本的にはそうしたフィードバック回路を開くメタ教育的精神のことなのだとは勝手に理解した。

もう一つのミソはこれが1回限りのものではなく、半期の講義を通して書かせ、半年というタイムスパンでメタ学習を行わせる点であろう。いつの間にか始まりいつの間にか終わっていた（単位をもらっていた）講義とは異なり、学習者自ら半年の中での自己変容を跡づけることができる。勿論、それはそのまま半年をカリキュラムとして構成し、学習者に自己変容を促せるような教育者側の周到な準備と戦略を前提とするのだが。

堀版「学習履歴」は大判で分厚い。半年の履歴を象徴的に、かつ物理的に支える存在感がある。大学の講義を学習者と教師の自己変容のスリリングな場ととらえる教育者堀先生のもう一つの面「もの作り精神」の賜物でもあるのだろう。

堀版「学習履歴」を自分で使えるかどうか、となるとわからない。堀先生がこれを使われた授業は教員の卵のためのものである。つまり、彼らは学習者であると同時に潜在的には教育者でもある。「学習履歴」に接する態度もメタ学習的であると同時に幾分はメタ教育的だったのではないか。私の学生はそうではない。ただ、手段のカタチはともかく、学習者にメタ学習的機会を用意すべきだという指摘は私にとっては貴重であった。

最後にFDについて一言。

私の大学風景の原像はフランスのそれである。教員はほとんど黒板を使わずひたすら話し続け、学生は懸命にノートをとり続ける。授業は3割で、後の7割は学生が補うべきだというのが教員側の意識にあるらしい。教師もプロなら、学生もプロというプロ集団では技術的なFDはさほど問題にならない。これは幻像に過ぎないかもしれないし、これをもとに日本の現実を嘆いても虚しい。現実を見据えれば、技術としてのFDも大切だ、と思う。教える技術が優れていても教える内容がなければ駄目だという論理は正論だが、まさにメタ教育的配慮の欠如を言いつくろうた

めに使われてきた憾みがある（正論であることに変わりはないのだが）。

それでもやはり技術至上のFDでは駄目だとも思う。留学中はフランス人学生のノートをとるとききかせてもらったが、教師の口頭での時間的な展開を自分なりに空間的・論理的な図式にまとめてゆく能力には驚いたものである。ノートをとる基礎訓練のない日本人学生に俄に同じことを求められないのはわかっているが、板書には学生の受動性を強化しかねない側面もあるのではないか。参加者からも出されたように、教える側が板書の仕方を改良すべきなのか学生にノートの取り方を訓練させるべきなのか、あるいは両方か、まさにメタ教育的問いが必要なのだと思う。

FD研修会に参加してつらつら思ったこと

学校教育講座 尾見 康博

私は、講義するのが苦手だ。受講生 30～100 人前後がもっともしんどい。半年かけて必死になれば、名前と顔を一致させて覚えることができるかもしれない人数だ。150～200 人を超す大教室の講義ならまだよい。どうせ受講生一人一人に目配りすることなど不可能、と割り切ることができるからだ。

そういう感覚もあって、個人的には、受講生の数によって、授業改善のあり方はずいぶん違うのではないかと思っている。

6 月 30 日の堀先生が発表された授業改善の工夫の例は、その意味では、ある程度少人数であればかなり有効な方法なのではないかと思った。もちろん、200 人の授業でも不可能ではないだろう。でも、少なくとも私のような非力な人間が、そこまで教育にエネルギーを注ぐことになると、おろそかになりがちの研究がますますおろそかになってしまうと思う。

これまで以上に、大学教員が教育にコストをかけることは必要であろう。とはいえ、研究偏重主義から、振り子が大きく振れすぎて教育偏重主義になりすぎることはやはり問題だ。そもそもこれまでの大学人が、偏重というほど研究をしてきたのか、という批判だってある。自らの研究に他人の研究を参考にするように、まずは、自らの教育に他人の研究を参考にするようになればよいのではないかと思う。甘いかもしれないが。

話は少しずれるが、FDに多少関連することで私見を述べたい。最近になって強調されている出席の（なかば）義務化や、実際導入された学級担任制のようなことには、少なからぬ抵抗感がある。大学は学生たちを自立させないようにしているのかと疑念を持ってしまうほどである。

最後に、FD研修会という新しい試みに、学部長が自ら率先してご自身の授業実践の一部を公開され発表されたことには大いに敬意を表したい。

研修会に参加して

音楽教育講座 小島 千か

学習者のための評価、教師が指導に活かす評価等、理論と実践をつなぐ部分での堀先生の研究は、先生の書かれた本等を通して些少なから存じておりましたが、講義とその後の質疑応答からは、色々考えさせられ勉強になりました。形成的評価の困難さが議論されておりましたが、私も、形成的評価の絶対的な方法などあり得ないと思います。その中で、堀先生の提示された、毎時間の学習者の学習履歴は、形成的評価の一助として大きな役割を果たしていると思いました。実際に様々な学生が書いた学習履歴には、書き方に学生の個性が出ていて、それが一覧表になっているので、その内容からは、授業改善とともに個々の学生理解ができると感じました。と同時に書かれたものから教師がいかに関心するかが重要であると改めて感じました。

私の授業改善への取り組み

—落ちこぼれ教師の悪戦苦闘を事例にして—

教育人間学部理科教育講座
堀 哲夫

はじめに

- ・ 学長からの問いかけ
→ 「教育人間科学部には教育の専門家が大量にいるのではないか」
- ・ 学生の力量をいかに高め、自分の欠点をいかに克服するか
→ 力量の変容の把握と自分の欠点の把握および改善が同時にできないか
- ・ 「指示されたことはできるが、それ以外のことはやろうともしないし、できない」
→ 座学の限界、テストで計測できる学力の限界
- ・ 大学入学前と卒業後で学生は望ましい変容をとげているか
→ 大学は付加価値をどこまでつけているか、大学教育の意味は何か
- ・ 学習過程および学習後におけるレポート提出の目的が適切に果たされているか
→ 「提出しさえすればよい」となっていないか
- ・ 授業後のみに行う成績評価に問題はないか
→ 教師が伝えようとしたことが適切に伝わっていてかつ理解できているか
- ・ 従前の授業方法の抱える問題点を自分がどう克服するか、教師と学生の意識のズレ
→ 授業の中で何がどうなっているのか把握し、適切な働きかけを行うことの大切さ
- ・ 学生が自分の学習をメタ認知することの大切さ

1. 授業改善の一つの試み

- (1) 授業評価と授業改善を同時に行うことができないか
→ 診断的評価、形成的評価、総括的評価を一体化する
- (2) 教師の授業と学生の学習をどう捉えていくか

→ 授業と学習両方に活用できる方法の導入

(3) 一枚ポートフォリオ評価 (OPPA: One Page Portofolio Assessment) の導入
→ 一枚の用紙の中で診断的評価、形成的評価、総括的評価を行う

- ① 学生は学習履歴を通して自己の変容を知り、学習の意味を知る (メタ認知)
→ 授業を通して何を学び、それが自分の中でどのようなになっているのか
知り、今後どうするのか考えることの重要性
- ② 教師は毎時間の学習者の学習履歴から次の授業改善を行う
→ OPPAを行うようになって授業計画やシラバスを深く意識し、
少なくとも以前よりも授業に真剣に取り組むようになった
→ 結果が出てから考えるのではなく指導過程における形成的評価の重要性
- ③ 学生がOPPの内容を確認することにより学習を構造化することにつながる
→ 自分の学んだことの全体を構造化してみると不十分なところが明確になる

2. 教師の弱点とその克服

(1) 教師の弱点とは何か

- ① 専門職としての実力があるか
- ② 引き写しや耳学問でないか
- ③ 名目や専門用語の使い分けに終始していないか
- ④ 初心者時代と変わらないのではないか
- ⑤ 教室を密室化し、気位高くないか
- ⑥ 批判を教師自身が助長していないか
- ⑦ かばいあい、なれあい、人情論の甘さに浸りきっていないか
- ⑧ 教師間の関係がバラバラでないか
- ⑨ 子どもや親の物足りなさはないか再考したことはあるか
- ⑩ 授業を通して教師としての向上はあるか

(2) 教師の弱点を克服する基礎は学問研究と授業改善

おわりに

- ・学ぶことの意味や面白さ楽しさがわかるようにするにはどうするか
- ・授業改善は授業評価だけでは不十分
- ・学生参加 (Ex. 設問応答中心) 型の授業構成の必要性和重要性

「私の授業改善への取り組み」をきいて

ソフトサイエンス講座 鈴木 俊夫

堀先生の「学生が自分の学習をメタ認知しつつ学ぶ」授業実践の話聞いて、総合的な学習の時間の試行を始めた5年前の附属中学でのことが思い出されました。「学習の履歴を確認しつつ自分の変化・成長を知り学習の意味を知る」方法としてポートフォリオを全面的に導入し、3学年ではいくつかの分野の中でテーマをきめて「卒業論文」を書こうという実践でした。大学でもそういう実践が必要とされるようになってきたかというのが一つの感想ですが、他方では、単に事実をわからせたり知識を教えたりする科目と考えられがちな場合には有効な方法であり、物事を考える学生を育てる上で必要なことだとも思います。

翻って自分の専門の数学でメタ認知をしながらの学習とはなんだろうかと改めて考えてみると、何のことはない復習をしっかりするという事に過ぎません。今日勉強したことはこういう意味でこういうことがわかったんだなという復習の形態になっていれば、あとはその積み重ねがあるのみということです。「変化・成長を感じる喜び」、「わからなかったことがわかる喜び」は共に学ぶ意欲につながるものです。ただ、そういう「意味」を考える力を持つべく、計算の練習や定義された言葉になれるための時間をかけなければならない数学の場合は、その初期段階ではまた異なった工夫が要求されると思います。

鳴り物入りで導入された、総合的な学習の実践を中学以降で経験した学生が大学に入学し始めました。大学の教師が、学生にメタ認知活動を意識させることはあってしかるべきですが、手取り足取りの配慮に使う時間は少なくて済めば済むほどいい大学（優秀な卒業生を送り出す）となるであろうことは確かです。

異なった分野の方々の試みを聞くことは楽しいし、参考になります。FD活動としては、授業を公開する試みと併行して今のやり方をしばらくは継続していただくと私にとっては有益です。

FD研修会に参加して

理科教育講座 廣瀬 裕子

堀先生ご自身の授業に対する情熱や工夫の数々などをうかがうことができ、大変勉強になりました。講義の進め方や学生とのかかわりのもち方などについては、他の先生方の考え方や工夫を直接お聞きする機会が少ないだけに、貴重な体験でした。学生自身が講義を通して、進歩の足跡をたどることができる工夫など、面白いと思いました。また、評価を最後にすることは手遅れであって、その講義の履歴の中で学生自身に分かるように行うことは大切である点、共感しました。

私のような理科系の領域の場合は、幼児が言葉を覚えるごとくにその学問領域の基礎的な用語や考え方を覚えることから始めなければなりませんので、今回お示しくくださったとおりににはできないというのも、偽らざる感想です。基礎知識が獲得できてから、学問の面白さなどを体験できることとなりますので、特に初学者を対象とする講義ではその知識の正確さをチェックすることも重要な任務となっていると考えています。講義のたびに小テストを実施して、翌週採点結果を返すなど、学生に寄り添って努力しているつもりですが、残念ながら、学生にとってはあまり歓迎される作業ではないようでして、こうした点での工夫などの実践をお知らせいただける機会をFDWGで考えていただけるとありがたいと痛感しています。

第1回学部FD研修会に参加して

大学院英語教育専修 谷内 路久

大学の先生方が授業改善のために努力されている姿を見ることができ、貴重な体験でした。いかに学生たちを育てるかを考えることが教える立場として大切であると感じました。このような姿勢は高校教員である私にとっても常に心に留めておかなければいけないことだと思いました。また、ポートフォリオ評価を使って、学生自身がどのように変わっていくかを自分で知ることが大事であるということを知り、たいへん共感できました。自分も現場で実践したいと考えています。

また、レジメの中に「指示されたことはできるが、それ以外のことはやろうともしないし、できない」という表現がありました。これは、本学に限ったことではなく、一般的なことであると思います。それは、山梨出身の学生に限って言えば、多くが高校時代に至れり尽くせりの指導を受け、自分で思った通りの方法で勉強してきていない、そのような余裕がないということに原因があると思います。問題集、参考書は一通り与えられ、GW、夏季冬季休業、週末と各教科から異常な量の宿題が出され、また、課外授業が行われ、学校が敷いたレールの上で、生活し学習してきていることに起因していると考えられます。高校現場にいる当事者として責任も感じています。同時に、学生がどのような生活をしてきているかをしっかり知ることが、良い教育の土台になるのではないかと感じました。

最後に、私は入学してからまだ3ヶ月ですが、毎日とても充実した楽しい時間を過ごさせていただいております。それは、FD研修会などで日頃の授業の向上を考えながら、指導くださっている先生方の厚い指導のおかげであるとわかり、感謝申し上げたいと思います。

FD研修会に参加して

教育人間科学部事務部補佐 小林 哲郎

昔の大教授は、大別すると、「古びた大学ノートを片手に黒板に向かい板書し、それに解説を加え時間が来るとさっさと帰る」タイプと「教科書を長々と読み続け、それに解説を加え時間が来るとさっさと帰る」タイプがあったと思われる。これは、「大学は、学生自らが学ぶところ」という既定概念にとらわれていたもので、大学が大衆化してきている今日では通用しないと思っていたところ、堀先生による「私の授業改善への取り組み」を聴講して今の先生方は「良い授業は何か」試行錯誤を繰り返しながら、自分の授業を見つめなおすなど大変苦勞しているものと感じ、FDは大切なものと思いました。また、FDは「授業方法の改善」に留まらず「教育改善」でなければならないとも思っています。

本学の中期計画の中に「FDを全学的に推進する委員会を設置する。」とあるが、それを推進するため、本学部が指導的立場に立ち、全学で本格的にFDへの取り組みが始まることに期待するとともに、本学のキャッチフレーズである「地域の中核、世界の人材」に相応しい人材育成を願いたいと感じました。